

バビロニアとヘレニズム（一）

——バビロンとアレクサンドロス大王——

はじめに

田 中 穂 積

前四世紀後半、後に大王と呼ばれたマケドニア王アレクサンドロスの東征によって、インドにいたる東方の地理や民族について、かなり詳細な情報が西方のギリシア人にもたらされた。そして、ヘレニズム時代にギリシア人、マケドニア人、その他の多くの民族が、いわゆるヘレニズム世界の植民集落に居住するようになる、さらに東方についての多くの知識が地中海の西方にまで伝わるようになった。

しかし、知られた東方事情が必ずしも正確なものばかりではとはいえない。そのことは、すでに前五世紀のヘーロドトスやクテーシアスらの記述、また、それ以後も見受けられるのである。たとえば、紀元前から紀元初頭にかけて活躍した歴史地理学者ストラボンによれば、バビロンは近くのセレウケイアに比べ、まったく寂れてしまったと表現しており (Strab. XVI, 1, 5)、それが当時を知る主要な典拠とみなされている。彼は後年、故郷のアマセイア (トルコのアマサヤ) において、メソポタミア事情に通じていたとおもわれるが、しかし後述するように、関連するバビロンの記述については疑わしい点もあり、問題が残る。それを解く鍵はバビロニア出土史料であるが、近年、

遅れ馳せながら、それら史料の研究によって、ヘレニズム時代のバビロニアの実状が解明されつつある。そこで、そうした成果を踏まえ、ここに、いくつかの問題点を提起しておきたい。

まず、政治事情からみてゆくことにする。アケメネス朝を倒したアレクサンドロスの王権が、オリエント的へと傾斜したことはよく知られている。ここでは、その王権の特徴をバビロンとの関係で取り上げてみたい。

一 アレクサンドロスのバビロン入城

アレクサンドロスはガウガメラにおいてダレイオス三世に圧勝すると、アルベラを通過して、バビロニアに入った。アッリアーノス、その他のアレクサンドロス関係史料によれば、ダレイオス三世の方は、メディアに向かって逃亡したとし、その動向を伝えている (Arian. III, 16, 1-2; Curt. V, 1, 3-9)。

一方、バビロニアにおける天体観測の記録では³⁾

「その月、「川の水位……」。その月十一日、パニックが王の「……」のまえにキャンプで起こった。王にたいする反抗を起こし(？)「……」。二十四日朝に、世界の王は「……」旗(？)を「……」彼らは互いに戦い、そして「……」の軍隊の惨(？)敗、王の軍隊は彼を見捨て、そして彼らのそれぞれの都市に「行った(？)」「……」彼らはグティ族の地に逃亡した「……」。

この史料から、ガウガメラの戦いとダレイオス三世、すなわち「世界の王」の敗退の事情が読み取れる。「その月十一日(ダレイオスの第五年、ウルールの月)」とは、前三三一年九月十八日であるが、この日は月蝕の二日前に当たる。パニックの原因については改めて検討することにした。なお「二十四日朝」とは、同年の十月一日朝、すなわちガウガメラの戦いの始まりである (cp. Ploutarchos, Alex. 31, 8; Cam. 19, 5)。

前三三二年十月、アレクサンドロスは、おそらくシッパルを通って近くのバビロンに入城した。アッリアーノス、またクルティウスは、バビロンの住民が挙ってアレクサンドロスを迎え入れたとしており、両者の表現は似通っている (Arrian. III, 16, 3; Curt. V, 1, 19-23)。アッリアーノスによれば、「すでにバビロン近くに來ていた彼 (アレクサンドロス) は、戦闘態勢をとって先頭に立ち、軍を進めた。ところが、バビロンの住民は、団体ごとに贈り物を携え、祭司や要職者たちと一緒に総出で彼を出迎えに来て、この都市それに城砦も財貨もすべて引き渡すことを申し出した。」と表現している。しかし、これはバビロンが喜んでアレクサンドロスを受け入れたということではなく、バビロンの支配者であったダレイオス三世を完敗させたこのマケドニア人の王の受け入れを余儀無くされた、また切羽詰まった状況下でおこなわれた歓迎であった。

また、先にあげた記録の続きによると^②、

「シッケルの「銀……」。その月、一日から「……」に、バビロンに來て言ったことは、「エサギラ「……」そしてエサギラの財産についてバビロニア人「……」。十一日、シッパルにおいてアレ「クサンドロス」の命令、「……」私はあなたがたの家々には入らぬであろう。十三日、「……」。「……」エサギラの外門に(?)そして「……」。十四日、これら(?)イオニア人たちは一頭の牡牛を「……」短くて、脂肪分の多い筋「……」。「……」世界の王アレクサンドロスはバビロンに「入った(?)」。「……」。「……」馬匹ならびに「……」の装備「……」。「……」そしてバビロニア人と「……」の人々「……」。「……」にメッセージ「……」。

「その月、一日」、つまり第七の月 (テシュリトウの月) 一日は、前三三二年十月八日である。このとき、ガウガメラにおけるアレクサンドロスの戦勝の報はバビロンに達していたとおもわれ、ここにみられる表現は、それ以後におけるバビロン側の慌ただしい対応策とアレクサンドロスを受け入れた事情を示しているとみてよい^③。また、ここ

Change, Proceedings of the Last Achaemenid History Workshop, April 6-8, 1990—Ann Arbor, Michigan, Leiden, (1994), 315, n. 12.

- (4) シャンネルの「オプスタ」 Oelsner, J., *Materialien zur babylonischen Gesellschaft Kultur in hellenistischer Zeit*, Budapest, (1986), 129-131.

二 アレクサンドロスによるバビロンの神殿修復

アッリアーノスは、「アレクサンドロスはバビロンに入ると、かつてクセルクセスが破壊した諸神殿と、なかでもバビロニア人が他の神々以上に崇めるペーロスの神殿の再建を住民に指示した。(中略) また、そこで(バビロン)、アレクサンドロスはカルデア人たちに出会い、カルデア人の勧めによってバビロンの諸神殿で祭礼を執り行い、とりわけペーロス神への供犠については、彼らの指図に従った。」と述べている (Artian, III, 16, 4-5)。また、別の箇所では、バビロンの町のあるペーロスの神殿は、焼き煉瓦でもって構築されており、規模のうえでは比喩ようなものであったが、ギリシアから引き上げてきたクセルクセスが完全に破壊していたので、アレクサンドロスは同じ場所に再建を思い立ち、瓦礫の取り除きを命じ、ある伝えによるといままです以上の大きさの神殿造営を企てた、と述べている (Id. VII, 17, 1-3)。

バビロンにおける主要な神殿は、アレクサンドロスが見たときには、かなり破損していたことは確かであろう。一方、バビロニア史料にみられる「ペールのティアラ作成のための黄金……」(前三二五年八月)とはアレクサンドロスによる奉獻のことであろうか⁽¹⁾。

ところで、クセルクセス(一世のこと)は、バビロンの諸神殿を破壊したのであるか。ヘーロドトスによれば、彼の時代、つまりクセルクセスの死後も、バビロンにおけるペーロス(マルドゥク)のジググラトは残っており

り、またペーロス神殿もあったとしており、この神殿の方には十二ペーキュスの純金の神像があって、これをクセルクセースは手に入れ、制止した祭司を殺害した、とのみ述べている (Hdt. I, 181, 2; 183, 3)。また、ストラボーンやディオドーロスは、クセルクセースがバビロンの神域を破壊したとしているが、その表現は必ずしも明確でない。クテシアスがクセルクセースにたいするバビロンの反乱をあげていることから (FGH 688, F 13, 26)、その報復としてのバビロン諸神殿破壊の話につながるのであるが、そうした破壊に関するバビロニア側の史料はいまだ見出されていない。それは古典作家による誤った解釈である、と指摘するむきもある。クセルクセースによる神域の破壊がみられたとしても、バビロン自体の復興は速かったとみてよい。それに、クセルクセース後のアケメネス朝の王も「バビロンの王」の称号を用い、またバビロンにおける新年祭をおこなったと考えられる⁶⁹⁾。

註

- (1) Sachs, A. J. and H. Hunger, *op. cit.*, No. 324, B Rev. 23, p. 201. 他に「関連する記述もみられる記録として」「三十日、川の水位が四指上がった。その月十三日、王の命令により」「・・・」それはエサンギルとエシル「カラヤ」の間の庭園で・・・」*Ibid.*, No. 328, Rev. 23'-24, p. 191. 「その月の十三日」「アラカサヌの月(第八の月)」は前三二九年十一月二十五日。
- (2) ストラボーンはペーロスの墓をクセルクセースが破壊したと云う (Strab. XVI, 1, 5)。ディオドーロスはペルシア人がそれを破壊したと云う (Diod. XVII, 112, 3)。クルー・マルドゥックのシッタラトをペーロスの墓としたのは、この両者の他、早くはクテシアスが云う (FGH 688, F 13, 26)。なお、ストラボーンは「シッタラトを」一辺が一スタタテオンの四角形の基礎で、高さも一スタタテオンの巨大な構築物として云う (cp. Arianos, VII, 17, 1-3)。一世紀のプリニウスは「バビロンには「ホテル・スルスの神殿があり、スルスは天文学の発見者である」と述べている (Plinius, NH VI, 121)。
- (3) クセルクセースの神殿破壊について、Kuhrt, A. and S. Sherwin-White, Xerxes' Destruction of Babylonian Temples, in: Sancisi-Weerdenburg, H. and A. Kuhrt, ed., *Achaemenid History II: The Greek Sources, Proceedings of the Groningen 1984 Achaemenid History Workshop*, Leiden, (1987), 69-78; *Id.*, The transition from Achaemenid to

Seleucid rule in Babylonia: revolution or evolution?, in: Sancisi-Weerdenburg, H., A. Kuhrt and M. C. Root, ed., *Achaemenid History VIII: Continuity and Change, Proceedings of the Last Achaemenid History Workshop, April 6-8, 1990—Ann Arbor, Michigan*, Leiden, (1994), 313-314, n. 8; Kuhrt, A., Alexander and Babylon, Sancisi-Weerdenburg, H. and J. W. Driyers, ed., *Achaemenid History V: The Roots of the European Tradition, Proceedings of the 1987 Groningen Achaemenid History Workshop*, Leiden, (1990), 122; Briant, P., The Seleucid Kingdom, the Achaemenid Empire and the History of the Near East in the First Millennium BC, in: Bilde, P., T. Engberg-Pedersen, L. Hannestad, and J. Zahle, ed., *Religion and Religious Practice in the Seleucid Kingdom*, Aarhus University Press, (1990), 41, 61, n. 2; cp. Stolper, M. W., Mesopotamia, 482-330 B. C., *CAH*, VI, 2nd Edition, (1994), 234-235.

ペルソンのタセルタセースに対する反乱の時期で「ペルソ」は古典文献から「前四八一年夏と前四七九年八月九月」²⁴⁹。Briant, P., La date des révoltes babyloniennes contre Xerxès, *Studia Iranica*, 21 (1992), 7-20; cp. Dandamaev, M. A., *A Political History of the Achaemenid Empire*, translated into English by W. J. Vogelsang, Leiden, New York, København, Köln, (1989), 183-187.

三 アレクサンドロスの王称号と王としての行為

アレクサンドロスは、バビロニアの天体観測記録のなかでは、次のように表現されている。「諸々の国の王、アレクサンドロスの第七年」^①、「カニ（Tan）の土地から来た王アレクサンドロスの第八年、第五の月から第八の月までの記録」^②、また単に「二十九日、王は死んだ」^③などがみられる。二番目のものは、征服者を意識しており、三番目の単に「王」という記し方は、経済文書などにもみられる表現である。

しかし、バビロンにおけるアレクサンドロスの王としての称号はどのようであったか。たとえば、バビロンでは伝統的に「バビロンの王、シュメールとアッカドの王」が使用されていたが、それに加え、アッシリアのアッシュール

バビバル、また新バビロニアのネブカドネザル二世は「諸々の土地の王」も用いた。バビロンを攻略したアケメネス朝のキュロス二世の場合、さらにいくつかの称号がみられるが、いわゆるキュロス・シリンダーの刻文には、バビロニアの主神マルドゥクの恩寵が強調されており、またウルク出土の刻文には、「エサギラとエジダの管理者」といった表現もみられる⁽⁴⁾。

ところで、アレクサンドロスより後のセレウコス朝時代になると、アンティオコス一世を顕彰したボルシッパ出土のシリンダー刻文には、「大王」、「正統の王」、「世界の王」、「国々の王」、「エサギラとエジダの管理者」、「マケドニア人」などの要素がみられる。この刻文にみられる王の称号は、アッカド語に訳されたベルセポリスのクセルクセス一世碑文の王称号のパターンに酷似している⁽⁵⁾。ただし、バビロンの反乱を鎮圧したとおもわれるクセルクセスには、「エサギラとエジダの管理者」といった表現は用いられていない。そこで、年代上、これら両王の間に入るアレクサンドロスには、アンティオコス一世の称号に近い表現が与えられていたとみてよからう。つまり、アンティオコス一世に与えられた神殿の「管理者」という言葉も、バビロンの諸神殿の復興を心掛けたアレクサンドロスにも与えられていた可能性は十分にある。また、アンティオコス一世にみられる「マケドニア人」は、クセルクセスにみられる「ペルシア人」という表現に替わるものであるが、その「マケドニア人」はアレクサンドロスに対して、初めて用いられたとおもわれる。

次に王と密接な関係にあった伝統的なアキトゥ(akitu)祭についてみておきたい。前二千年紀のメソポタミアでは、バビロンの勃興にともない、アキトゥ祭はマルドゥクを奉祭する重要な大祭として、年初、つまり春分の時期におこなわれた。前一千年紀になると、バビロンにおけるアキトゥ祭は華美な御練もあって、ニサンヌの月の最初の十一日間にわたって執り行われた。新バビロニアにおいては、王もこの祭に参加しなければならず、同月五日目に王はマルドゥクの前で潔白を誓い、そしてマルドゥクの手を取り、郊外のアキトゥ神殿まで同行した。ただし、ナボニド

スの時代、この王がバビロンで不在のゆえに、アキトゥ祭をおこなわなかった例がみられる^⑥。
アケメネス朝時代、王のアキトゥ祭、参加の有無については判然としない。前五三八年のカンビュセス二世の記録に関しては、正確なことはいえない。ペルシア王がアキトゥ祭に参加しなくても、多分この祭儀で王の祝福が執り行われたであろう^⑦。

したがって、バビロンの神官たちは、マルドゥクの神殿を再興しようとしたアレクサンドロスをアキトゥ祭で祝福したとみてよい。アレクサンドロスの場合、前三三一年にバビロンに入り、その後、遠征のため不在であったが、バビロンへの帰還が前三三二年早春とすれば、このとき、彼はバビロンの伝統的祭儀に則って、アキトゥ祭に参加する機会をえたかもしれない。なお、アレクサンドロスがバビロン不在中、彼の王衣をもって、アキトゥ祭がおこなわれたと推定することもできる^⑧。

註

- (1) Sachs, A. J. and H. Hunger, *op. cit.*, No. -329, B Obv. 1', p. 181.
- (2) *Ibid.*, No. -328 LE, p. 191. ハンニモンにヤハセ、Hanú. また Hanú とは、本来、古バビロニア王国時代では、アモリ人を指しつづけたが、後代の楔形文字キキストからトラキマの住民に言及してつづらる。Grayson, A. K., *Babylonian Historical Literary Texts*, University of Toronto Press, (1975), 26. など。後代の使用例でつづらば、同書、三五頁、など。Grayson, A. K., *Assyrian and Babylonian Chronicles*, Appendix C, s. v. Hanu, p. 256. ヲルニム世國が、ハニリスム時代には、^⑨ Hanú, Hanú の用例、アヒキトが、^⑩ ハニリスムを始めた地域に居住した者たを想定したものと考えられる^⑪。
- (3) Sachs, A. J. and H. Hunger, *op. cit.*, No. -322, B Obv. 8', p. 207; *cp.* No. -328, Rev. 23', p. 191. マンタサンシロスの「大」H J 20 7 2 3 2 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100
Late-Babylonian Economic Texts, by D. A. Kennedy, ZA, 61, (1971), 161-162. マンタサンシロスの死、前三三三年六月十日に於ける^⑫。

- (4) Dandamaev, M. A., *op. cit.*, 51-55, 55, n. 9; Stolper, M. W., Mesopotamia, 482-330 B. C., *CAH*, VI, 2nd Edition, (1994), 234-235. 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100 101 102 103 104 105 106 107 108 109 110 111 112 113 114 115 116 117 118 119 120 121 122 123 124 125 126 127 128 129 130 131 132 133 134 135 136 137 138 139 140 141 142 143 144 145 146 147 148 149 150 151 152 153 154 155 156 157 158 159 160 161 162 163 164 165 166 167 168 169 170 171 172 173 174 175 176 177 178 179 180 181 182 183 184 185 186 187 188 189 190 191 192 193 194 195 196 197 198 199 200 201 202 203 204 205 206 207 208 209 210 211 212 213 214 215 216 217 218 219 220 221 222 223 224 225 226 227 228 229 230 231 232 233 234 235 236 237 238 239 240 241 242 243 244 245 246 247 248 249 250 251 252 253 254 255 256 257 258 259 260 261 262 263 264 265 266 267 268 269 270 271 272 273 274 275 276 277 278 279 280 281 282 283 284 285 286 287 288 289 290 291 292 293 294 295 296 297 298 299 300 301 302 303 304 305 306 307 308 309 310 311 312 313 314 315 316 317 318 319 320 321 322 323 324 325 326 327 328 329 330 331 332 333 334 335 336 337 338 339 340 341 342 343 344 345 346 347 348 349 350 351 352 353 354 355 356 357 358 359 360 361 362 363 364 365 366 367 368 369 370 371 372 373 374 375 376 377 378 379 380 381 382 383 384 385 386 387 388 389 390 391 392 393 394 395 396 397 398 399 400 401 402 403 404 405 406 407 408 409 410 411 412 413 414 415 416 417 418 419 420 421 422 423 424 425 426 427 428 429 430 431 432 433 434 435 436 437 438 439 440 441 442 443 444 445 446 447 448 449 450 451 452 453 454 455 456 457 458 459 460 461 462 463 464 465 466 467 468 469 470 471 472 473 474 475 476 477 478 479 480 481 482 483 484 485 486 487 488 489 490 491 492 493 494 495 496 497 498 499 500 501 502 503 504 505 506 507 508 509 510 511 512 513 514 515 516 517 518 519 520 521 522 523 524 525 526 527 528 529 529-587. 587. 588 589 590 591 592 593 594 595 596 597 598 599 600 601 602 603 604 605 606 607 608 609 610 611 612 613 614 615 616 617 618 619 620 621 622 623 624 625 626 627 628 629 630 631 632 633 634 635 636 637 638 639 640 641 642 643 644 645 646 647 648 649 650 651 652 653 654 655 656 657 658 659 660 661 662 663 664 665 666 667 668 669 670 671 672 673 674 675 676 677 678 679 680 681 682 683 684 685 686 687 688 689 690 691 692 693 694 695 696 697 698 699 700 701 702 703 704 705 706 707 708 709 710 711 712 713 714 715 716 717 718 719 720 721 722 723 724 725 726 727 728 729 730 731 732 733 734 735 736 737 738 739 740 741 742 743 744 745 746 747 748 749 750 751 752 753 754 755 756 757 758 759 760 761 762 763 764 765 766 767 768 769 770 771 772 773 774 775 776 777 778 779 780 781 782 783 784 785 786 787 788 789 790 791 792 793 794 795 796 797 798 799 800 801 802 803 804 805 806 807 808 809 810 811 812 813 814 815 816 817 818 819 820 821 822 823 824 825 826 827 828 829 830 831 832 833 834 835 836 837 838 839 840 841 842 843 844 845 846 847 848 849 850 851 852 853 854 855 856 857 858 859 860 861 862 863 864 865 866 867 868 869 870 871 872 873 874 875 876 877 878 879 880 881 882 883 884 885 886 887 888 889 890 891 892 893 894 895 896 897 898 899 900 901 902 903 904 905 906 907 908 909 910 911 912 913 914 915 916 917 918 919 920 921 922 923 924 925 926 927 928 929 930 931 932 933 934 935 936 937 938 939 940 941 942 943 944 945 946 947 948 949 950 951 952 953 954 955 956 957 958 959 960 961 962 963 964 965 966 967 968 969 970 971 972 973 974 975 976 977 978 979 980 981 982 983 984 985 986 987 988 989 990 991 992 993 994 995 996 997 998 999 1000
- (5) *Seleucid royal ideology: the cylinder of Antiochus I from Borsippa*, *JHS*, 111 (1991), 71-86; Oppenheim, A. L., *The Babylonian Evidence of Achaemenian Rule in Mesopotamia*, *CHI*, 2, (1985), 529-587. 587. 588 589 590 591 592 593 594 595 596 597 598 599 600 601 602 603 604 605 606 607 608 609 610 611 612 613 614 615 616 617 618 619 620 621 622 623 624 625 626 627 628 629 630 631 632 633 634 635 636 637 638 639 640 641 642 643 644 645 646 647 648 649 650 651 652 653 654 655 656 657 658 659 660 661 662 663 664 665 666 667 668 669 670 671 672 673 674 675 676 677 678 679 680 681 682 683 684 685 686 687 688 689 690 691 692 693 694 695 696 697 698 699 700 701 702 703 704 705 706 707 708 709 710 711 712 713 714 715 716 717 718 719 720 721 722 723 724 725 726 727 728 729 730 731 732 733 734 735 736 737 738 739 740 741 742 743 744 745 746 747 748 749 750 751 752 753 754 755 756 757 758 759 760 761 762 763 764 765 766 767 768 769 770 771 772 773 774 775 776 777 778 779 780 781 782 783 784 785 786 787 788 789 790 791 792 793 794 795 796 797 798 799 800 801 802 803 804 805 806 807 808 809 810 811 812 813 814 815 816 817 818 819 820 821 822 823 824 825 826 827 828 829 830 831 832 833 834 835 836 837 838 839 840 841 842 843 844 845 846 847 848 849 850 851 852 853 854 855 856 857 858 859 860 861 862 863 864 865 866 867 868 869 870 871 872 873 874 875 876 877 878 879 880 881 882 883 884 885 886 887 888 889 890 891 892 893 894 895 896 897 898 899 900 901 902 903 904 905 906 907 908 909 910 911 912 913 914 915 916 917 918 919 920 921 922 923 924 925 926 927 928 929 930 931 932 933 934 935 936 937 938 939 940 941 942 943 944 945 946 947 948 949 950 951 952 953 954 955 956 957 958 959 960 961 962 963 964 965 966 967 968 969 970 971 972 973 974 975 976 977 978 979 980 981 982 983 984 985 986 987 988 989 990 991 992 993 994 995 996 997 998 999 1000
- (6) Grayson, A. K., *Assyrian and Babylonian Chronicles*, No. 7, col. ii, 11. 5-7, 10-11, pp. 106-107. 106 107 108 109 110 111 112 113 114 115 116 117 118 119 120 121 122 123 124 125 126 127 128 129 130 131 132 133 134 135 136 137 138 139 140 141 142 143 144 145 146 147 148 149 150 151 152 153 154 155 156 157 158 159 160 161 162 163 164 165 166 167 168 169 170 171 172 173 174 175 176 177 178 179 180 181 182 183 184 185 186 187 188 189 190 191 192 193 194 195 196 197 198 199 200 201 202 203 204 205 206 207 208 209 210 211 212 213 214 215 216 217 218 219 220 221 222 223 224 225 226 227 228 229 230 231 232 233 234 235 236 237 238 239 240 241 242 243 244 245 246 247 248 249 250 251 252 253 254 255 256 257 258 259 260 261 262 263 264 265 266 267 268 269 270 271 272 273 274 275 276 277 278 279 280 281 282 283 284 285 286 287 288 289 290 291 292 293 294 295 296 297 298 299 300 301 302 303 304 305 306 307 308 309 310 311 312 313 314 315 316 317 318 319 320 321 322 323 324 325 326 327 328 329 330 331 332 333 334 335 336 337 338 339 340 341 342 343 344 345 346 347 348 349 350 351 352 353 354 355 356 357 358 359 360 361 362 363 364 365 366 367 368 369 370 371 372 373 374 375 376 377 378 379 380 381 382 383 384 385 386 387 388 389 390 391 392 393 394 395 396 397 398 399 400 401 402 403 404 405 406 407 408 409 410 411 412 413 414 415 416 417 418 419 420 421 422 423 424 425 426 427 428 429 430 431 432 433 434 435 436 437 438 439 440 441 442 443 444 445 446 447 448 449 450 451 452 453 454 455 456 457 458 459 460 461 462 463 464 465 466 467 468 469 470 471 472 473 474 475 476 477 478 479 480 481 482 483 484 485 486 487 488 489 490 491 492 493 494 495 496 497 498 499 500 501 502 503 504 505 506 507 508 509 510 511 512 513 514 515 516 517 518 519 520 521 522 523 524 525 526 527 528 529 529-587. 587. 588 589 590 591 592 593 594 595 596 597 598 599 600 601 602 603 604 605 606 607 608 609 610 611 612 613 614 615 616 617 618 619 620 621 622 623 624 625 626 627 628 629 630 631 632 633 634 635 636 637 638 639 640 641 642 643 644 645 646 647 648 649 650 651 652 653 654 655 656 657 658 659 660 661 662 663 664 665 666 667 668 669 670 671 672 673 674 675 676 677 678 679 680 681 682 683 684 685 686 687 688 689 690 691 692 693 694 695 696 697 698 699 700 701 702 703 704 705 706 707 708 709 710 711 712 713 714 715 716 717 718 719 720 721 722 723 724 725 726 727 728 729 730 731 732 733 734 735 736 737 738 739 740 741 742 743 744 745 746 747 748 749 750 751 752 753 754 755 756 757 758 759 760 761 762 763 764 765 766 767 768 769 770 771 772 773 774 775 776 777 778 779 780 781 782 783 784 785 786 787 788 789 790 791 792 793 794 795 796 797 798 799 800 801 802 803 804 805 806 807 808 809 810 811 812 813 814 815 816 817 818 819 820 821 822 823 824 825 826 827 828 829 830 831 832 833 834 835 836 837 838 839 840 841 842 843 844 845 846 847 848 849 850 851 852 853 854 855 856 857 858 859 860 861 862 863 864 865 866 867 868 869 870 871 872 873 874 875 876 877 878 879 880 881 882 883 884 885 886 887 888 889 890 891 892 893 894 895 896 897 898 899 900 901 902 903 904 905 906 907 908 909 910 911 912 913 914 915 916 917 918 919 920 921 922 923 924 925 926 927 928 929 930 931 932 933 934 935 936 937 938 939 940 941 942 943 944 945 946 947 948 949 950 951 952 953 954 955 956 957 958 959 960 961 962 963 964 965 966 967 968 969 970 971 972 973 974 975 976 977 978 979 980 981 982 983 984 985 986 987 988 989 990 991 992 993 994 995 996 997 998 999 1000
- (7) *Xerxes' Destruction of Babylonian Temples*, in: Sancisi-Weerdenburg, H. and A. Kuhrt, ed., *Achaemenid History II: The Greek Sources*, 73-76.
- (8) *Ibid.*, 75.

四 「王朝」についての予言」タブレット、カルデア人

「予言」アレクサンドロスに関する文学的な楔形文字文書を取り上げておきたい。それはアッカド語で書かれていて、通常「王朝」についての予言」と呼ばれている粘土タブレットである⁹⁾。この文書は、王朝の消長やその交替を予言するところを体裁をとって、固有の王名を伏せた、事後予言(vaticinia ex eventu)の種のものである。そして、最後

に、この予言は結社の者の他に洩らしてはならない、としているのも、『ダニエル書』に類似している。ただし、アツカド語によるこの種の予言の起源については、よく分かっていない。

この「王朝についての予言」タブレットは、四コラムからなっており、そこに現われた王朝については、アッシリアの滅亡、バビロニアの興隆（コラムⅠ）、バビロニアの滅亡、ペルシアの興隆（コラムⅡ）、ペルシアの滅亡、マケドニアの興隆（コラムⅢ）、アレクサンドロス死後のマケドニア人の支配・・・（コラムⅣ）とみなされる。そして、新しい王朝は、良い支配、または悪い支配、いずれかで始まっているが、良い支配は悪い支配へと変化している。コラムⅡの最後は、バビロニアの王ナボニドスを倒したアケメネス朝のキュロス二世であつて、アツカドにおいて、彼の支配は悪しき支配であらう（であつた）、としている。そのあと、アケメネス朝の王たちの支配については、コラムⅢに移ることになるが、このコラムの最初の三行は欠落箇所が多く、五行目まではアルセース、六―八（五年間の支配）行はダレイオス三世のことである²⁾。本稿では、コラムⅢ、Ⅳをあげておく。（次の【】内の数字は行数）

「王朝についての予言」

コラムⅢ

【一】「……」【二】「……王たち……」【三】彼の父の／それ……
【四】二年間、「彼は王権を行使するであらう」【五】宦官がその王を「殺害するであらう」。
【六】誰か公子があらわれて、【七】攻撃し、王権を「奪い取るであらう」【八】五年間、「彼は」王権を「行使するであらう」【九】カニ一の軍隊「……」【一〇】攻撃するであらう……「……」【一一】「カニ一は」彼の軍隊を「敗北させるであらう」【一二―一四】彼らは彼から略奪し、剥ぎ取るであらう。後に、彼（そ

の王)は「彼の」軍隊を再び装備し、そして武器を整えるであろう。【一五】エンリル、シャマシユ、そして「マルドゥク」は【一六】彼の軍隊に味方し、「そして」【一七】カニーの軍隊の殲滅を彼は「成し遂げるであろう」。

【一八】彼は有り余る戦利品を持ち去り、そして【一九】彼の王宮に「それを運び込むであろう」。【二〇】不運を「かこっていた」人々は【二一】安寧を「喜ぶであろう」。【二二】その地のムードは「ハッピーそのものとなるであろう」。【二三】免税「……」(以下破損)

コラムⅣ

(約六行欠損)

【一】「……」【二】「……年間」「王権」を彼は行使するであろう。【三】「……」
 ……【四】「……」を攻撃し、「そしてその地を獲得するであろう。【五】「……」【六】「……」
 ……【七】「……」偉大なる神々の秘密／タブー【八】あなたはそれを秘伝を受けた者に示してもよいが、しかし秘伝を受けていない者に、あなたは(それ)を示してはならない。【九】
 「それは」諸々の土地の主、「マルドゥクの秘密／タブーである。【一〇】「……」最初、タブレット
 【一一】「……」避難民【一二】「……」書かれ、授けられ【一三】「……」【一四】「……」(以下破損。なお横線は行間に刻まれた仕切り線である)

コラムⅣ、九―二三行はアレクサンドロスの東征に関するものである。「カマー(Ham)」については、一九頁註(2)参照。一―行目の敗北とは、イッソスの戦い(前三三三年十一月)におけるダレイオス三世の敗北であろうか。この王はアレクサンドロスの攻撃を受けながら、軍備を整えて迎撃を試みようとする。このとき、メソポタミアの主なる神々はダレイオス三世の側につく。アレクサンドロスの軍隊に打ち勝ったダレイオス三世は、分捕った多くの戦利品

を王宮に運び入れる。そして、平和と安寧が訪れ、免税が行われ? . . . 。ここにみられるダレイオス三世の勝利とアレクサンドロスの敗北は、史実に反することになる。この「王朝についての予言」は、故意にアレクサンドロスの支配を抹殺しようとしたものであろうか。二〇—二三行にみられる表現のニュアンスについては難しい。

コラムⅢの最初は、約六行の破損がある。また、このコラムにおいて、再び仕切り線がみられる。それを支配者の区切りとすれば、現存部分の二行目までは、アレクサンドロス没後のアッリダイオス（ピリッポス三世）それに、アレクサンドロス四世、三行目はアンティゴノス、四—六行目はセレウコス一世であらうか。これについては、次の稿で取り上げたい。

ところで、古典の多くは、アレクサンドロスの最後について、その予言や予兆に関する出来事を述べている。その一つは、アレクサンドロスが東征の後、初めてバビロンの町に入ろうとしたとき、カルデア人占い師たちが彼のバビロン入りは、彼のためにならないと勧告したことである⁽³⁾。なかでも、アッリアーノスは、アレクサンドロスがカルデア人の勧告に疑いを持ったとしている。つまり、彼がバビロンに入って神殿の復興を速めると、かつて以前の王たちから神殿修復などという名目のお金を受け取り、彼らで山分けしていた、そうした収益がえられなくなるためであった、という理由をあげている (Arian. VII, 17, 5-4)。

ここにみられるアレクサンドロスのカルデア人に対する猜疑心については、アッリアーノスの記述のみである。しかし、アッリアーノスは、アリストブローロスの伝えによると、アレクサンドロスは、西側よりバビロンに入るようにとのカルデア人の勧告を受け入れた、ということもあげている。アッリアーノスの用いた史料の問題点や分析はさておき、この箇所にみられるアレクサンドロスのカルデア人に対する疑いは、文脈上から、オリエントとギリシアの思想の相違を対比しようとしたアッリアーノス自身の史観が濃く反映されているとみてよい⁽⁴⁾。

註

- (1) BM 40623 (82-4-28, 168). Grayson, A. K., *Babylonian Historical Literary Texts*, 24-37.
 この「王朝だつづつの子言」タブレットは、コラムⅡにまつて支配の良し、悪しをあげたあと、横線を刻み込んで脱落をつけている。キエロスの場合、コラムⅡの最後で言及されたあと、どこで彼の支配が終わるのか分からない。コラムⅢの最初はキエロスのことではなさそうである。コラムⅢでは、三行の欠落のあと五行目はアルセース、六一八行はダレイオス三世とみられる。ダレイオスも指摘していろいろうた、マケドネス朝の支配に関する言及及び短すぬ (Grayson, A. K., *op. cit.*, 26)。
 さて、ラングーンは、この「王朝だつづつの子言」は、本来、表面がニコラト、裏面がニコラトあつたとする。しかし、読む順序は表面の左から右へ、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲのコラムへと移り、次に天地を返して、その裏面を今度は右から左へ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵのコラムを述べてゆく。したがって、本来みられたⅢ、Ⅳのコラムが現存タブレットには欠けてしまつており、その破壊部分にはアケメネス朝のダレイオス一世からブルタクセルクセース三世とつたる支配（「子言」）があげられてつたとみる。
 Lambert, W. G., *The Background of Jewish Apocalyptic: The Ethel M. Wood Lecture delivered before the University of London on 22 February 1977*, London, (1978), 12-13; Sherwin-White, S., *Seleucid Babylonia: a case study for the installation and development of Greek rule*, in: Kuhrt, A. and S. Sherwin-White, ed., *Hellenism in the East: The interaction of Greek and non-Greek civilizations from Syria to Central Asia after Alexander*, London, (1987), 10-11.
 したがって、ダレイオスとラングーンは、このコラム番号のあげ方は異なつてゐる。本稿で取り上げたコラム部分の番号、Ⅲ、Ⅳはダレイオスとラングーンは、このコラム番号、Ⅳ、Ⅴのコラムと相当する。
- (2) Diodoros, XVII, 112; Curtius, X, 4; Arrianos, VII, 16, 5 ff.; Appianos, B. C. II, 153; Ploutarchos, Alex. 73; Iustinus, XII, 13, 3.
- (3) *Arrian: History of Alexander and Indica, II* (New version by P. A. Brunt), LCL, (1983), 259, n. 5; Smelik, K. A. D., 'The Omnia Moris' in the Histories of Alexander the Great: Alexander's attitude towards the Babylonian priesthood, *Talanta*, 10-11 (1978-79), 93-97; cp. Bosworth, A. B., *Alexander the Great Part I: The events of the reign*, CAH, VI, 2nd Edition, (1994), 843.